

# 西宮ロット・エ・ガロンヌ交流市民の会

2014. 9. 17 VOL.124 発行者：会長 森田正樹／編集：広報部

この夏は、本当に雨が多くて、夕方のニュースでは、全国どこかの町や村で、どしゃぶりの映像が流されていますが、皆様いかがお過ごしですか？

水の災害の被害も大きくて、人ごとには思えず心が痛みます。

この広報誌が届くころには、お天気も落ち着いていて、秋晴れを満喫できていますでしょうか。



～

## LeGの友人たちの来日！お楽しみに！～

前号にてお知らせした、ロット・エ・ガロンヌからの友人たち一行の来日について少しずつ詳細が固まってきました。

「西宮の友の会」会長のマリー・フィトンさんはじめ 10 人の小グループですが、リピーターも多く、根っからの日本ファンばかりです。予定されている行程は以下の通りです。

11月10日（月）夕刻：関西国際空港着。京都へ。京都市内泊

11日（火）～14日（金）：京都、彦根、琵琶湖など

**15日（土）：NLeGとの交流日。西宮市・船坂での一日**

16日（日）～18日（火）：金沢、宮津、天の橋立など

19日（水）：大阪

20日（木）～22日（土）：岡山、広島、宮島、高松

**23日（日）：神戸。23時20分、関空発、帰国**



この中で、私たちNLeGとしては **15日（土）と23日（日）** を全体交流日といたします。

15日は終日を船坂で過ごします。（前号で夜は西宮に帰って歓迎会、とお知らせいたしましたが、彼らが京都泊であること、翌日の出発が早いことなどから、歓迎会も早い時間に船坂で行い、解散時間を早くしました）

### **15日（土）の予定：**

11:00：船坂集合（さくらやまなみバス、または自家用車利用=現地に無料駐車場あり）

※さくらやまなみバスに乗られる場合、次のバスに乗ってください。

〈西宮戎 10:12→JR さくら夙川 10:14→阪急夙川 10:20→舟坂橋着 10:50〉

11:30：地元の方々提供のランチ（カレー¥500）旧船坂小学校ランチルームにて。

昼食後、船坂ピエンナーレを池田さんの案内で見学

（松谷武判画伯の作品は、茅葺古民家に展示されます。ぜひ鑑賞しましょう。）

※船坂ピエンナーレについての詳細は、<http://funasaka-art.com/> をご覧ください。

15:00：歓迎会準備→歓迎会（ピエンナーレ出展作家さんとの交流の可能性もあり）

19:00：解散、片付け、(船坂からの最終バスは 20:00)

**参加申し込み**：会場のキャパの関係から申込み順(メール又は FAX)に先着 20 名

**参加費**：ピエンナーレ入場料¥500、昼食¥500、パーティー¥2000

## **23日(日)の予定**

13:00~16:00：有志で神戸散策

17:00 お別れ会→三宮センタープラザ B1、レストラン“ポルタマリ”にて

**申し込み**：先着順 30 名まで。 **参加費** ¥3500

19:20 三宮発の関空行きリムジンバスに皆で見送り

いずれも、参加お申込みは 9 月 30 日までに、  
**mail: info@nleg.net または Fax: 0798-32-8673 まで!**

この秋、皆でフランスの友人たちとの交流を深めましょう!!



## **フランス美術あれこれ 8**

フランス絵画を集めた少し変わった切り口の展覧会が、今、大阪市立美術館で開催されています。「こども展」(10月13日まで)では、モネ、ルノワール、マティス、ピカソ、ルソー、そしてレオナルド・ダ・ヴィンチからそうそうたる画家たちが描いた「こどもの肖像画」86点を見ることができます。

こどもが描かれるのはどんな時でしょう、宗教画の聖母子、クピドや天使として、あるいは、王侯貴族の家族の肖像画のひとりとして描かれて来ました。

しかし、こどもが一個の人格をもつ対象として描かれるのは、19世紀になってからのことです。この展覧会では、画家が報酬と引き替えにではなく、親として自身の、または身近なこどもを描いた、愛情と温かみ溢れる作品が集められています。普段は見ることのできない、画家が遺族に託し大事に保管されてきた個人の所蔵品も展示されています。

有名なエドゥアール・マネの弟ウジェーヌ・マネとベルト・モリゾ夫妻の愛娘ジュリーは、母のモデルを務め、「庭のウジェーヌ・マネとその娘」(1883年 個人蔵)では、繁茂する夏草に囲まれた白い服の後ろ姿で父とともに描かれ、いきいきとした筆使いは、モリゾの印象派作品の傑作です。「犬を抱く娘」(1886年 個人蔵)はジュリー8歳の姿です、その8歳の娘の肖像画を夫妻はルノワールに依頼します、ルノワールの新しい「アングル風」の優美な画風に魅せられてのことでした。「ジュリー・マネの肖像、あるいは猫を抱く子ども」(1887年 オルセー美術館)では、ルノワールは猫を抱いた彼女の姿を描き、顎と楕円形の目など少女と猫のよく似たところを時に強調し、くっきりとした輪郭、甘みを抑えた色調、滑らかな表面に仕上げました。

ジュリー・マネは長じて画家となり母のモリゾと同じく、身近な人々や家族生活をこのんで描きます。「オーギュスタンの肖像」(1911年 個人蔵)は自分が名付け親であった甥の肖像画です。少年も後に画家になります。

まさに影一つ無い明るい時代「ベル・エポック」の家族の肖像画のつながりといえるでしょう。

ジュリー・マネ Julie Manet 1878-1966

両親のもとを定期的に訪ねてくる画家や音楽家、詩人たちに囲まれて若い頃を過ごし、ルノアールは三度、彼女の肖像を描いています。しかし、ジュリーは何よりも、彼女を溺愛していた母親モリゾのモデルでした。「モリゾはジュリーをすべての年齢で、あらゆる状況下で描いた」。

16歳で母を無くしたあと、詩人のマラルと画家のドガが後見人になり、ルノアールも絵の先生かつ後見人になります。ジュリーは作品を発表することもなく、両親が建てたパリの家で、印象派の傑作に囲まれて亡くなります。

そうそう、レンピッカの「初めて聖体を拝領する娘」も見逃せませんよ。

参考文献

「こども展 名画にみるこどもと画家の絆」 2014年 大阪市立美術館

大谷美術館では「2014 イタリア・ポローニャ国際絵本原画展」好評開催中！！  
こちらもよろしく。

記：森田 正樹



## カランドリエ「ジャミラ」

夏休みを利用して東京駅を訪れた時、改札外にある東京キャラクターストリートのウルトラマングッズのアンテナショップに入りました。

小さな子ども達も好きそうなウルトラマンや怪獣のフィギュアに、大人向けのネクタイやハンカチなどの商品があり、お客さんの年齢層もバラバラでした。

その中でふと、1960年代から人気の怪獣ジャミラ(ゆるキャラ風にアレンジされていました)のポストカードが目につきました。

ジャミラ、ジャミラと記憶は3年前に遡ります。

「ねえ、ママ知ってた？怪獣ジャミラってフランス人だったんだよ！」

当時小学生だった息子が、目を丸くしながら、説明してくれました。

当時学校の道徳の時間で、ウルトラマンの話を使って(実験的な)授業が行われていたらしく、怪獣ジャミラの可哀想なエピソードが紹介されていたようです。

怪獣ジャミラとは、子どもの頃一度は、セーターの丸首を頭まで被り、袖から手先だけ出してその姿を真似をした人も多いと思います。

ウルトラマンの話では、元々、怪獣ジャミラは人間の宇宙飛行士で、人類の未来のためのミッションで働いていたところ、事故が起きて宇宙で1人見捨てられ水の無い過酷な宇宙環境の中で生きるために怪獣へと化身したのです。そして、恨みから故障していた宇宙船を治し、人類に復讐しに地球へ帰るのですが、人間としての心も戻る時あるために苦しみ、結局は怪獣としてウルトラマンに倒されるのです。

最後は、その生涯を可哀想に思った？科学特捜隊からお墓を作ってもらえるのですが、そこには、フランス語で墓碑銘があったらしく、息子は「!!!」と驚いたのです。しかも、人間時代は白人男性だったようです。

白人男性？と私は違和感を感じました。

私が知っている「ジャミラ」はマグレブ(北アフリカ系)フランス人でした。

「ジャミラ」は北アフリカ系の女性に多い名前です。

個人的に知っている「ジャミラ」は、小学校の先生のアシスタントで、給食、休み時間や放課後に、生徒たちと過ごす先生で、頼もしい存在でした。ベテランとしての存在感を示す一方、ある時期、保護者達からクレームが届くようになりました。暫くして、子どもから「ジャミラは、校長先生に注意されて子ども達みんなに謝ってくれたんだよ」と伝えられました。

大ベテランが、子どもに謝罪するんだ！フランスの学校ってある意味公正で凄いいし、子どもに正式に謝罪できる大人も偉いなあ、と感じました。

周りの保護者からこっそり聞いたところ「ジャミラはアルジェリア移民一世で苦労していて、少し前に離婚して、将来の不安からか体調も良くなかったみたいよ」との噂話でした。

子ども達と過ごす時間、時々ブツブツとアラビア語で文句言っているように見えたそうです。

他方、怪獣ジャミラの名前の由来が気になります。

調べてみると、

ジャミラ・ブーパシャ

という、フランスからのアルジェリア独立に大きな影響を与えた、アルジェリア独立運動家の(当時)若く美しい女性でした。

怪獣ジャミラと、ジャミラ・ブーパシャとの共通点は、不当な扱いを受けて戦うレジスタンス、ということでしょうか。

フランスの小学校のジャミラの不調な時に言われたアラビア単語を、外国人だからか耳の良い息子はずっと覚えていて、1年後に同級生のアルジェリア系のママに、その意味を尋ねました。

「ごめんね。悪い言葉なのよ。」

フランス引越し間もない頃でも、フランス語での悪口は、フランス語に慣れていない私にも何と無く分かったものです。反対に私が咄嗟に言い返した日本語の内容も、わかるはずの無い相手(フランス人)に何と無く伝わっていました。

不当な発言に対して、国籍人種問わず、人は敏感なのかもしれませんね。

記：藤枝 知子

#### 編集後記：

先日、ベルギーから「わざわざタカラヅカを見にきた！」というイタリア人女性と仲良くなりました。日本語は全然できないのに、「月組」「トップさん」「二番手」「みりおくん」「研3」などなどポンポン出てきて、私よりずっと詳しく、びっくりするやらなんやら……

一年に数回見に来るそうで、その時も、ショップでお買い物していたので「何買ったの？」と尋ねたら、「写真！！アルバム作っているのよ」と、大盛り上がりで、再会の約束をしました（＾＾）

11月のマリーさん、楽しみですね。旅先の異国で歓迎されるって、本当にうれしいものです。

大歓迎で、盛り上げたいですね。

榎尾 裕美子